

十字架から降りて来い

イザヤ書 53:1~6

マタイ 27:32~44

結構前に出た映画ですが、「パッション」という映画を見た方がおられると思います。イエス様が裁判を受け、十字架で亡くなるまでの12時間を描いたアメリカの映画です。あまりにもリアルな表現で、話題になりました。私も見ましたが、時々目を閉じたくなる場面がありました。血だらけになっているイエス様、死にそうになって呻いているイエス様を鞭で打ち続ける兵士たち、あちこち飛ぶ血と肉の破片、もうやめて、といたくなくなる、その残忍さで目を覆いたくなくなる場面に戦慄が走る思いで映画を見ました。映画が終わってからそのまま座り込んで泣いている人々がいました。たぶんクリスチャンであると思います。私自身もしばらく離れることができなく、涙を拭いていました。

本当に目をそらしたくなる悲しい映画でした。しかし、私たちが目をそらすことで済むことなのでしょう。主イエスの十字架での死はこの世に実際にあった、歴史的なことなのです。本当は映画でみられるものよりもっと残忍な光景であったのに違いありません。ヨハネによる福音書にはイエス様が亡くなった後の様子を詳しく書いていますが(19:31~)、そこを見ると、イエス様の死を確かめようと兵士の一人が槍で主イエスのわき腹を刺す場面があります。すると、すぐ血と水が流れ出た、と記録しています。

なぜ、神の子はこのような死に方をしなければならなかったのでしょうか。今、十字架の刑はなくなりましたが、人間の残忍さと血だらけの歴史は昔も今も変わりありません。私たちの世界の戦争や殺戮、様々な事件がそれを物語っています。多発するテロや事故、暴動、強姦、様々な考えられないことが起こっています。何人が死んだ、ある人が重傷だ、ということに慣れている私たちがいます。東洋においても西洋においても、昔も今も変わらない私たちの血だらけの歴史の中に、主イエスは人間として来られたのです。そして、私たちの罪がもたらした闇の世界の真中を歩まれたのです。私たちが受けるべきのろいと苦しみを背負って十字架で死んでくださったのです。

神様は人間のすべての不幸、惨めさ、忌まわしい姿の根本である人間の罪を取り除こうと、独り子イエスにそれをすべて負わせたのです。私たちの世界が表すようにそれはただ安らかに慰めることで解決される問題ではないからです。イエスの十字架の死の残虐さは私たちが直面しなければならない姿であるのです。忌まわしい主の十字架の死こそ、私たちに救いをもたらす命の道なのです。

イエス様が生きておられた当時には、犯罪人を処罰する方法として、火あぶりあるいは、首を切る、そのようなものがありました。しかし、それよりもより凶悪な犯罪人は十字架刑を下したのです。それも大抵身分が低い人たちを対象にしている、ひどい屈辱と苦痛が伴う処刑の方法でした。この十字架刑が行われるのを見た人たちの中には、その光景があまりにも忌まわしくて一生悪夢にうなされたという話もあったそうです。人たちは「十字架刑」という言葉さえタブー視していました。そのような十字架で、そのような方法でイエス様は死にました。

イエス様が行ったことは、罪人と捨てられた者を愛し、弱い者を助け、病に苦しむ者を癒したことでした。暗闇の中に光となり、絶望している者の希望になったのです。寂しい人、痛みある人たちの友になりました。そうなのに、イエス様は十字架で死ななければならなかったのです。神の子であるイエスはローマ兵士に捕まえて、冷やかされ、唾を吐かされ、鞭に打たれました。主イエスに従っていた弟子たちもどこかに行ってしまうました。愛する弟子にも裏切られました。主イエスのご自身を弁護しようとしませんでした。ほふり場にひかれる小羊のように、毛を切るものの前に物を言わない羊のように主は口を利かなかったのです。神と同じ身分である神の子が蔑視され、捨てられた者とな

りました。

人たちは主イエスに向かって言います。「神殿を打ち倒し、三日で建てるもの、神の子なら、自分を救ってみろ。そして、十字架から降りて来い。」「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。」「降りて来い」救い主がなぜ十字架で犯罪人のように死ぬかということでした。私たちの救い主、イエスは天地を支配する全能のお方です。すべてが可能な方です。十字架からすぐ降りてくることもできるお方でした。しかし、イエス様は、ご自身がそのように十字架で死ななければ私たち人間の罪が赦されないことを知っておられました。ご自身が生け贄としてささげられなければならないという神様の御旨に従ったのです。

有名な神学者カール・バルトは、主イエスの十字架には二つのことが示されているのだと言いました。一つは、主イエスがあのようにむごたらしく死ななければならないほど私たち人間の罪があまりにも重くて恐ろしいということです。神の子がそのようにならなくては救われることができないほどの私たち人間の罪と悪が深い、絶望的なものであるのかが主の十字架には示されているのだそうです。

そして、もう一つは、独り子イエスを私たち人間のために、この世に送ってくださった神様の大きな愛が示されているといえます。ご自身の独り子さえ惜しまず、私たち人間のために送ってくださった神様、そして、私たちのために十字架の上で独り子を死なせた、神様の大きな愛があるのだと言いました。

使徒パウロはローマ書の中でそのような神様の愛について言っています。「もし神が私たちの味方であるならば、だれが私たちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。(ローマ 8:31,32)」それで、どのような迫害、苦しみの中でも神様の愛を信頼し、希望をもって歩むよう、使徒パウロは、迫害と試練の中にいるローマの信徒たちに慰めの手紙を送っているのです。

また、使徒パウロは言います。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、・・・召されたものには神の力、神の知恵です。(Iコリント 1:22~24)

世の中の人たちにとっては失敗の姿であり、愚かな、その十字架が私たちの武器であり、力なのです。そのむごたらしい主の十字架が私たちの誇りであり宝であります。苦しみ、つらいことであっても、痛みや絶望のときがあっても、私たちはイエス様の十字架を仰ぎ見ながら慰めと力を得るのです。それで、険しい道も讚美しながら歩き、狭い門にも希望を持って入ることができるのです。

イエス様に向って「十字架から降りて来い」という声は、今の私たちにも向かっています。血だらけの忌まわしい存在が、その失敗者が救い主になれるはずがない、変わったことしないで、日本にも素晴らしい宗教があるのではないか、時間もお金ももったいない、教会に行くよりもっと、まずすることがあるでしょう、そのように私たちも冷やかされるときがあります。

しかし、十字架の道だけが復活の道であり、永遠の命を得ることができる道です。忌まわしい主の十字架こそ、私たちの人生の真の道しるべであり、真理です。それにこそ、本当の慰めと幸せがあるのです。十字架から降りて来いという声に負けてはいけません。「十字架の言葉は、滅んでいくものにとってはおろかなものですが、私たち救われるものには神の力。(Iコリント 1:18)」です。希望です。主イエスの十字架をしっかりとつかみ、自分の十字架を背負って生きる者のみが、主の復活に生きることができます。どのような試練や苦しみも私たちを倒すことができないのです。主イエスを甦らせた神様の全能の力が私たちを支えてくださるのです。

主イエスの約束を信じて、主の十字架を仰ぎ見ながら、自分の十字架を背負って、おのおのの人生を全うする祝福がありますよう切に願います。